

**【一般演題3】 第16席 『黄帝内經』と馬王堆医書にみる言語世界の比較**

京都 東郷 俊宏

前漢の後期から後漢にかけて成立した『黄帝内經』、および前漢初期の馬王堆漢墓より出土した医書群は、とともに戦国末期から秦漢交代期にかけて、あるいは前漢を通じて集大成をみた当時の医療思想を反映したものとされ、これまでにその内容については同時期に成立した諸文献（『淮南子』『管子』など）との比較を通じ様々な検討がなされてきた。天と人を相似の存在と捉え、人に顕れた疾病を自然の変動になぞらえつつ説明する天人相関説や、四季の循環と陰陽・五行説と結びつける発想はこの時期に発展し、両医書にももりこまれていったわけだが、このことは両者が医書としての枠組みを超えて、当時における宇宙観・自然観をも表現していたことを示すものといえる。また馬王堆医書では『五十二病方』に典型的にみられるように医術療法と呪術療法が混在しており、医学と呪術が未だ未分化の状態で認識されていたことを示していよう。

両医書が単なる医書にとどまらず、当時の混沌とした自然観を表徴したものであるとすれば、そのことは両者の言語・形式にもなんらかの影響を与えるにはいられないはずである。本題では『黄帝内經』と馬王堆医書の言語に焦点をあて、両医書が当時にあっていかなる「読まれかた」を要求するものであったかを、後漢以降に編まれた医書における言語との違いにも触れつつ探っていきたい。